弔い

わたしは多摩川の岸辺で
骨灰を撒き散らした

　　だらりとシーツの縁からはみ出た掌
　　わたしはそれを掴んだ

化学物質のような
ある匂いが鼻をかすめる

ヨシ原の広がる川岸
斜めにしがみ付く小鳥

　　（単なる御遊びである）

生の歓びなど知らぬわたしが生き
生を愛しんだ御前が死んだ

時間的運動の真なるか
それとも偽なるかはどうでもよい

撒き散らされた灰が水面に張り付き
やがて沈んでゆくのであろう

軽薄なきらめきを散らしながら
陽は斜めに落ちてゆく

　　（ここからわたしの秒読みが始まる）

(2011.6.4)